

113 生まれつきの盲人をいやす(2)

ヨハネによる福音書 9：13～41

▶ファリサイ派の人々、事情を調べる

13 人々は、前に盲人であった人を **ファリサイ派** の人々のところへ連れて行った。

14 イエスが土をこねてその目を開けられたのは、**安息日** のことであった。

→安息日は、金曜日の日没から始まり、土曜日の日没に終わる。律法では、ユダヤ人やその奴隷が安息日に働くことを禁じられていた（出エジプト記 20：8～11、申命記 5：12～15）。盲人を癒した時、イエスは安息日の律法に違反したと非難された。

→ファリサイ派の人々は、命の危険がない限り、安息日に癒しを行うのは律法違反だと考えた。しかし、神は、人のために定められた安息日に恵みの業を行うことを禁止してはおられなかった（イエスは、口伝律法を完全否定された）。

→マルコによる福音書 2：27b 安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。

15 そこで、ファリサイ派の人々も、どうして見えるようになったのかと尋ねた。

彼は言った。

「**①あの方が、わたしの目にこねた土を塗りました。そして、②わたしが洗うと、③見えるようになったのです。**」→生まれつきの盲人の単純な証し（神の責務と人の責務が表現されている）

16 ファリサイ派の人々の中には、

発言A 「その人は、安息日を守らないから、神のもとから来た者ではない」（→リビング・バイブル：そのイエスという者は、神から遣わされた者ではない。安息日に仕事なんかしたんだから）と言う者もいれば、

発言B 「どうして罪のある人間が、こんなしるし（→奇跡＝セメイオン：ギリシア語）を行うことができるだろうか」（→リビング・バイブル：罪人にすぎない普通の人間に、こんな奇跡が行えるだろうか……）と言う者もいた。

こうして、彼らの間で意見が分かれた。

→ファリサイ派の人々の中には、光を見出し始めている者もいる（発言B）。

17 そこで、（意見の対立が起こっていることからファリサイ派の）人々は盲人であった人に再び言った。

「目を開けてくれたということだが、いったい、お前はあの人をどう思うのか。」

彼は「**あの方は預言者です**」と言った。・・・まだ、イエスを神だとは思っていない・・・

→預言者エリヤやエリシャ（列王記上 19：19 他）は奇跡を行ったので、イエスの奇跡を見聞きした人々は、旧約聖書の叙述を連想した。これらの預言者たちは、時として、将来について幻を見た。あるいは、身の周りに起こる出来事を観察し、神の啓示の言葉を伝えた。

18 それでも、ユダヤ人たちはこの人について、盲人であったのに目が見えるようになったということを信じなかった。ついに、目が見えるようになった人の両親を呼び出して、19 尋ねた。

「この者はあなたたちの息子で、生まれつき目が見えなかったと言うのか。それが、どうして今は目が見えるのか。」

→ユダヤ人たちは、最高法院に属する議員で祭司職に就き、ファリサイ派や他の指導者たちに影響力を持つユダヤ教の教師でもあった。

20 両親は答えて言った。

「これがわたしどもの息子で、生まれつき目が見えなかったことは知っています。21 しかし、どうして

今、目が見えるようになったかは、分かりません。だれが目を開けてくれたのかも、わたしどもは分かりません。本人にお聞きください。もう大人ですから、自分のことは自分で話すでしょう。」

→両親は、ユダヤ人たちの仕打ち（会堂からの追放）を恐れて（22節）、息子は証言（責任）能力のある年齢なので、直接本人に聞いてほしいと、自分たちの責任を回避している。

22 両親がこう言ったのは、ユダヤ人（→霊的指導者）たちを恐れていたからである。ユダヤ人たちは既に、イエスをメシアであると公に言い表す者がいれば、会堂から追放すると決めていたのである。

→会堂が行う三つの懲戒

①Neziphah：7日間の追放

②Niddui：30日間の追放

③Cherem：完全追放、社会的交流断絶

} ユダヤ人としての将来は消える
→会堂から追放されると、
経済的、社会的、宗教的地盤を失う。

23 両親が、「もう大人ですから、本人にお聞きください」と言ったのは、そのためである。

→メシアはマシアハ（ヘブライ語）で油注がれた者の意味。その者が特別に選ばれた者であることを示し、神の力がその人に臨むしるしでもある。

24 さて、ユダヤ人たちは、盲人であった人をもう一度呼び出して言った。

「神の前で正直に答えなさい。わたしたちは、あの者が（律法を守らない）罪ある人間だと知っているのだ（→リビング・バイブル：イエスなどではなく、神をあがめなさい。あいつは悪党だ）。」

→神の前で正直に答えなさい＝（新改訳）神に栄光を帰しなさい。

25 彼は（知らないことと、知っていることをきちんと区別して）答えた。

「あの方が罪人かどうか、わたしには分かりません。ただ一つ知っているのは、目の見えなかったわたしが、今は見えるということです。」

26 すると、彼らは（また同じことを）言った。

「あの方はお前にどんなことをしたのか。お前の目をどうやって開けたのか。」

27 彼は（皮肉的に）答えた。

「もうお話ししたのに、聞いてくださりませんでした。なぜまた、聞こうとなさるのですか。あなたがたもあの方の弟子になりたいのですか。」

28 そこで、彼らはののしって言った。

「お前はあの方の弟子だが、我々は（律法を守る）モーセの弟子だ。29 我々は、神がモーセに語られたことは知っているが、あの方がどこから来たのかは知らない。」

30 彼は（思っていることをはっきりと）答えて言った。

「あの方がどこから来られたか、あなたがたがご存じないとは、実に不思議です。あの方は、わたしの目を開けてくださったのに。31 神は罪人の言うことはお聞きにならないと、わたしたちは承知しています。しかし、神をあがめ、その御心を行う人の言うことは、お聞きになります。」

32 生まれつき目が見えなかった者の目を開けた人がいるということなど、これまで一度も聞いたことがありません。33 あの方が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならなかったはずです。」

34 彼らは、「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか」と言い返し、彼を（会堂の外に追い出し（追放し）た。・・・こうして、この男は、あらゆる生活の基盤を失ってしまった・・・

▶ファリサイ派の人々の罪

35 イエスは彼が外に追い出されたことをお聞きになった。
 そして彼に出会うと、「あなたは人の子を信じるか(Do you believe in the Son of Man?)」と言われた。

36 (霊の目が開いていない) 彼は答えて言った。
 「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが。」

37 イエスは言われた。
 「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」→イエスの神性宣言

38 彼が、「主よ、信じます」と言って、ひざまずくと、

39 イエスは言われた。
 「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる。」

→ (リビング・バイブル) するとイエスは言われました。「わたしがこの世に来たのは、心の目の見えない人に見えるようにするため、また、見えると思いついでいる人に、実は盲目だということをわからせるためなのです。」

→目が見えないと認める人は、福音のメッセージを聞いて、目が見えるようになる。目が見えると思っ
 ている人は、盲目のままに留まる。

40 イエスと一緒に居合わせたファリサイ派の人々は、これらのことを聞いて、「我々も見えないとい
 うことか」と(傲慢に)言った。

41 イエスは言われた。
 「見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。(まだ、罪の程度は軽いからだ。)しかし、**今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る。**(つまり、重い罪がそのまま残るの
 です。)」

→ (リビング・バイブル) 「もしあなたがたが盲目だったら、罪に問われませんでしよう。しかし、
 何もかもわかっているとあくまで言いはるので、あなたがたの罪はそのまま残るのです。」

【参考】一週間 曜日の起源は古代バビロニアにあり、ユダヤ教徒、キリスト教徒はこの考えを採用した。

1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	
土曜日(土星)	日曜日(太陽)	月曜日(月)	火曜日(火星)	水曜日(水星)	木曜日(木星)	金曜日(金星)	←古代バビロニア
0-6 0-12 12-18 18-24 日没	0-6 0-12 12-18 18-24 日没	0-6 0-12 12-18 18-24 日没	0-6 0-12 12-18 18-24 日没	0-6 0-12 12-18 18-24 日没	0-6 0-12 12-18 18-24 日没	0-6 0-12 12-18 18-24 日没	0-6 0-12 12-18
ユダヤ歴では、一日は日没に始まり、翌日の日没に終わる。→ 夕べがあり、朝があった。 (創世記1章5b、8b、13a、19a、23a、31c節)							
ユダヤ教徒 キリスト教徒 →	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目
	① 第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、② 第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、③ 安息なされた。(創世記2章2節)→ 日曜日	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日(安息日)

【参考】 貧困者に支持者の多いファリサイ派 →ヘレニズム(=ギリシア風)文化に対して否定的

ユダヤ教の教派で、イエスの時代に最も高く評価されていたのは、中間時代に誕生したファリサイ派で、この時代、民衆にとっては、ユダヤ教=ファリサイ派的ユダヤ教であった。

ファリサイ派はハスモン朝※1時代に形成され、天使、悪霊、魂の永遠性、死後の世界を信じ、律法遵守を徹底し、特に安息日や断食(週2回、木曜日と金曜日)、施しを行うことや清めの儀式を強調した。

律法学者(モーセ五書<トーラー>—創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記—を研究する学者)の多くがファリサイ派に属し、聖書(旧約)の独自の研究と伝承による解釈を固執、主張した。聖職者である律法学者(ラビ rabbi)を信仰の仲介者とし、ユダヤ人会堂の多くを管理していた。ファリサイ派は、律法を研究、遵守して、どのように生きるべきかについて教えていたために、民衆に尊敬されていた。ファリサイ派の名称は、「パルーシーム(パルシム)」=「分離する者」あるいは「清い者」を意味するヘブライ語に由来するとされるが、正確には不明である。

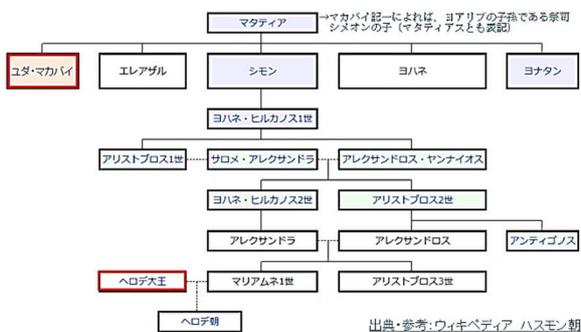
ユダヤ人指導者の中には密かにイエスを信じる者もいたが、ユダヤ人会堂から追放されるのを恐れ、このことを公言しなかったし、もし、それが発覚した場合は、ユダヤ人指導者たちは、イエスを信じるようになった者をユダヤ人共同体や会堂から追放した(ヨハネによる福音書9:22)。

イエスを訪問したニコデモは最高法院に属する議員で、ファリサイ派の教師でもあった(ヨハネによる福音書3:1)。

また、ファリサイ派の人々はイエスが自分たちの立場や影響力を脅かすと考え、イエスを殺そうと企んだ(マタイによる福音書26:1~5、マルコによる福音書14:1~2、ルカによる福音書22:1~6、ヨハネによる福音書11:45~57)。

エルサレム神殿の崩壊(AD70年)後はユダヤ教の主流派(神殿に拠っていたサドカイ派は消滅)となり、会堂に集まって聖書を読み、祈りを捧げるスタイルが、ユダヤ教のスタイルとなっていた。

※1: BC 140年頃からBC 37年までユダヤの独立を維持して統治したユダヤ人王朝。BC 166年に起きたユダ・マカバイによるセレウコス朝軍への決起から約20年後に成立。フラウィウス・ヨセフスによればハスモンという名は一族の先祖、祭司マタティアの祖父の名前に由来しているといわれている。



フラウィウス・ヨセフスは、帝政ローマ期の政治家及び著述家である。AD66年に勃発したユダヤ戦争でユダヤ軍の指揮官として戦ったがローマ軍に投降し、ティトゥスの幕僚としてエルサレム陥落にいたる一部始終を目撃、後にこの顛末を記した「ユダヤ戦記」や「ユダヤ古代誌」を著した。

ヨセフスは、青年時代にサドカイ派やエッセネ派などを経て、最終的にファリサイ派を選んでいく。